

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 4 月 27 日現在

機関番号：72622

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320137

研究課題名（和文） 南インドの刻文に見る中世宗教運動の展開

研究課題名（英文） Medieval Religious Movements as seen in South Indian Inscriptions

研究代表者

辛島 昇（KARASHIMA NOBORU）

財団法人東洋文庫・研究部・研究員

研究者番号：10014466

研究成果の概要（和文）：

10-14 世紀に南インドで行われた宗教活動の実態はこれまでに不明で、それを究明すべく、10-17 世紀のタミル語刻文で、マタ（僧院）に言及するものを集めて、その活動を調査した。

その結果、10・11 世紀には、北方からやってきたバラモンの苦行者がマタの活動を主導し、それがチョーラ王家や社会上層の支持を得たことが分かった。しかし、12・13 世紀になると、一般の民衆がそれに参加するようになり、彼らの間で広まっていたタミル地方の宗教的伝統がそれに強く反映するようになり、タミル・シャイヴァシッダーンタという新しい宗派が成立することになる。

また、マタに言及する刻文の分布は 12・13 世紀に集中していて、そのことと、マタ活動への参加者の検討から、この宗教運動が、12-14 世紀に、下層民の勢力拡大をもたらした社会変動と密接に関連していることが判明した。

以上に判明した新しい知見は、後掲の国際的研究誌に二本の論文として発表した。また、外国人研究者を招聘して開催した研究会において、この知見につき議論し、国際的な注目を喚起した。

研究成果の概要（英文）：

Not much was known about the religious movement carried out in South India during the period from the 10<sup>th</sup> to 14<sup>th</sup> centuries. In order to clarify this religious movement, we have collected the Tamil inscriptions of that period referring to *mathas* (monasteries) and examined the activities of those *mathas*.

Our examination has revealed that in the 10<sup>th</sup> and 11<sup>th</sup> centuries the *matha* activities were led by Brahmanas, who had come from the North, supported by the Chola royal family and people of the upper social sections. Contrary to that, the masses began to join the *matha* activities in the 12<sup>th</sup> and 13<sup>th</sup> centuries, and consequently the traditional religious notions held dear by them gave influence on its activities, causing finally the establishment of a new religious school called Saiva Siddhanta.

The fact that chronological distribution of the inscriptions referring to *mathas* shows the concentration in the 12<sup>th</sup> and 13<sup>th</sup> centuries, together with our examination of the social groups, which joined the *matha* activities in those centuries, clearly shows that this religious movement carried out through *mathas* was closely related to the social change which caused the power increase in the lower social sections during the period from the 12<sup>th</sup> to 14<sup>th</sup> centuries.

We have published these new findings in the two articles published in an internationally well-known research journal. We have also discussed the issue in the seminars joined by foreign specialists to impart our findings among scholars in the world.

## 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	4,100,000	1,230,000	5,330,000
2010年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2011年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
年度			
総計	9,600,000	2,880,000	12,480,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：南アジア、ヒンドゥー教、刻文、中世社会史、マタ（僧院）、社会変化

### 1. 研究開始当初の背景

南インド中世の宗教的發展については、新しく宗派を開いた宗教者の著した教義的宗教文献によって、その哲学的發展については知ることができるが、それが国家や民衆とどう関わり、果たして宗教運動として展開したかどうかについては、知ることが出来ずにいた。研究代表者と二人の海外研究協力者、スッパラーヤル (Y. Subbarayalu)、シャムガム (P. Shanmugam) 両教授は、これまで、中世タミル語の刻文を検討することによって、南インド社会の發展と變動を明らかにしてきた。

### 2. 研究の目的

上記1の状況を踏まえ、10世紀から17世紀にかけて数多く残るタミル語の刻文、および研究分担者が専門とするカンナダ語の刻文中、宗教活動がそこで行われたマタ（僧院）に言及するものを精査することによって、それを克服することを考えた。すなわち、マタの活動を通して、これまでに知りえなかった事実、すなわち、新しい宗教理念が、国家や民衆とどう関わり、宗教運動としてどう展開したかを明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

刻文史料の多くはテキストが未発表で、インドの刻文史料編纂所でしかそれを見ることが出来ないため、日本人研究者がインドに赴き、インド人研究者とともにそれらの刻文史料を精査して研究を行い、また、インド人研究者を招聘して論文の作成を行うようにした。更に、南アジアの諸地域について同様

の研究を行ってきたドイツ人他の外国人研究者の協力を得て、問題を大きなパースペクティブで捉えるようにした。

### 4. 研究成果

主要な論文は、インドの歴史協議会 (Indian Council of Historical Research) が発行している国際的研究誌 *Indian Historical Review* に発表した下記の論文2点であるが、この二つの論文によって、これまで知ることができなかった重要な事実を解明することが出来た。

すなわち、第1論文では、10-13世紀のマタの活動実態を検討し、10・11世紀には、北方から来住したバラモン苦行者によってマタの活動が始められ、社会上層の支持を得たが、12・13世紀には、その活動が一般民衆の間にも広がり、先に北方からもたらされた新しい要素と民衆の間に根強くのこる南インドの伝統的宗教要素とが結合し、13世紀における新しい宗派シャイヴァシッダーンタ派が成立した過程を明らかにした。

第2論文では、刻文の検討を17世紀まで拡大することで、マタ活動のピークは13世紀であることをつきとめ、シャイヴァシッダーンタ派の成立をもたらしたのは、12-13世紀に起こったタミル地方における社会變動であったことを明らかにした。

以上を明らかにし、その成果を国際的研究誌に発表すると同時に、日本で研究会を開き、招聘した海外の研究者と共に、成果を分かち合った。初年度には、研究代表者と分担者がドイツに赴き、海外研究協力者のクルケ (Hermann Kulke) 教授と意見を交換して、研

究方針を検討したが、第2年度には、インドから、ケーララ地方の中世宗教運動に詳しいヴェルタット (Kesavan Veluthat)、ヴァリヤー (Raghava Variar) 両教授、スリランカの宗教運動研究者インドラパーラ (K. Indrapala) 教授を招いて研究会を行い、第3年度には、前述のクルケ教授およびスリランカのタミル語刻文研究者パドゥマナーダン (Pathmanathan) 教授を招聘して研究会を行った。

これらの出版と研究会によって、今回の研究成果を、世界の研究者と共有できたものと考ええる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

(1) Karashima Noboru, Y. Subbarayalu and P. Shanmugam, “*Mathas and Medieval Religious Movements in Tamil Nadu: An Epigraphical Study*”, *Indian Historical Review*, Vol.37, No.2, 2010, pp.217-34

(2) Karashima Noboru, Y. Subbarayalu and P. Shanmugam, “*Mathas and Medieval Religious Movements in Tamil Nadu: An Epigraphical Study (Part II)*”, *Indian Historical Review*, Vol.38, No.2, 2011, pp.199-210

[学会発表] (計2件)

(1) Ota Nobuhiro, “Who Built ‘the City of Victory’? Representation of a ‘Hindu’ capital in a ‘Islamicate’ world”, The Centre for Contemporary India Area Studies at the National Museum of Ethnology. International Conference: The City in South Asia, 18 July 2010, The National Museum of Ethnology, Osaka

(2) Karashima Noboru, “The Importance of Indian Epigraphy: The Emergence of Medieval South Indian Society as Revealed by the Change in Imprecations in Tamil Inscriptions”, The Nalanda-Srivijaya Lecture Series, 2 December 2010, Nalanda-Srivijaya Centre, Institute of Southeast Asian Studies, Singapore.

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

辛島 昇 (KARASHIMA NOBORU)  
財団法人東洋文庫・研究部・研究員  
研究者番号: 10014466

### (2) 研究分担者

大田 信宏 (OTA NOBUHIRO)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授  
研究者番号: 40345319

### (3) 連携研究者

徳永 宗雄 (TOKUNAGA MUNEO)  
京都大学・文学部・名誉教授  
研究者番号: 70143998

### (4) 海外研究協力者

Hermann Kulke (クルケ)  
Professor Emeritus, Kiel University

Y. Subbarayalu (スッバラヤーラ)  
Professor (Rtd), Tamil University

P. Shanmugam (シャンムガム)  
Professor (Rtd), Madras University